

村山由佳・『海を抱く』(Ⅱ)

酒 井 英 行

3 光秀と恵理・衝突・融和

「サラリーマン風」の男と寝て、ホテルから出てきたところを光秀に目撃されてしまった恵理。望まぬ負の接点が光秀との間に生じたのである。「いい子」、「優等生」のペルソナに亀裂が生じることを恐れる恵理。ペルソナの下に隠していた顔を周囲に知られることは自己崩壊に等しい、と恵理は思ってしまうのである。恋心を抱いている都に知られることは耐えられないのだ。「とにかく口止めしなければ」、「何とかして約束を取りつけなくてはならない、でないと私の人生はめちゃくちゃになってしまう」……。

「山本君。私と……寝ない?」。世間に対して、「いい子」のペルソナを守るために、光秀に対して、それと異なる自己演出をしようとする苦渋の選択。生まれつきの「いい子」だと自分でも錯覚しそうになるほどに、ペルソナが素顔に近似していた恵理にとっては、膝が震えるほどの自己演出であったことは疑う余地がない。「蓮つばな女を演出することですか」
平静さを保てないほど、光秀の口封じをするための自己演出に度を失っていたのである。

「それに悪いけど私、誰にも借りなんか作りたくないの。だからこれは、頼んでるんじゃないやなくて取り引きだと思つてよ。あなたはこれから先、好きな時に私と寝ていい。すごく危ない日とか、あと……あれの最中とか、そういう時以外だったら、たいがいは応じてあげられる。でもそのかわり、このことと、それからもちろんあの夜のことも、絶対に誰にも言わないって約束して。条件はそれだけ。簡単でしょ？」

光秀を性的逸脱の共犯者に仕立てることで、口封じをしようとする恵理。「いい子」の仮面をかなぐり捨て、しかし、自己破産を招かない、難しい自己演出である。計算されてはいるが、苦し紛れの演出に過ぎないことは、「いい子」の仮面を投げ捨てても、プライドだけは失うまいとする恵理の強がりの偽装が証明しているであろう。「蓮っぱな女」を偽装することで、崩れ落ちそうな自己をかううじて支えているのである。「ぜんぜん似合ってねえよ、そういうセリフ。はつきり言つて浮いてる。まるで、清純派女優がスケバンの役やってみたいだけ」、恵理の偽装は光秀に透けて見えているのである。女であるおのれの性的身体を投げ与えることで、口封じを仕掛けようとしている恵理が、「取り引き」をしていることは間違いない。しかし。光秀のセックス・アピールに、「スカートの奥のほうがむずかゆくなってくる」恵理がいることも確かなのである。だから、口封じを仕掛ける自己演出は恵理の欺瞞と言わざるを得ない。口封じを仕掛ける「外向きの顔（性的自己）」と、「体の欲望」に突き動かされる性的存在としての自己との緊張関係に置かれてはいる恵理。性的欲望の突き上げを、「取り引き」という建て前の論理にすり替えることで、プライドを守ろうとする恵理がいるのである。「ひざまずいて抱いてほしいと懇願する」ことは、恵理のプライドが許さないのだ。

「投げ出された餌の理由について考えるなんて……そんなの、反則だ」、自虐的な自己告白によって「スケバン」を自己演出し、光秀の顔を「苦痛と自己嫌悪」にゆがませる、という攻撃的な挑発に出ざるを得ない恵理。それは、「いい子を演じ続けてとうとうキレてしまった」感情の迸りを光秀にぶつける、衝動的な自己破壊的行為、自爆的行為とも考えられる。

荒々しく恵理を畳に押し倒し、のしかかってきた光秀。

もう、誘惑するどころではなかったし、すでに取り引きでもなかった、ただただ、早く裸にされたくて、さつき握った彼のあれを奥まで入れてもらいたくて、気が狂いそうだった。早く。早く私に栓をしてよ。こんなことを思うくらいだから、とっくに狂っているのかもしれない。

恵理の「誤算」である。「ヘテロとしての性的欲求の強さに関しては、いささか度を越してしまっている」恵理の性の領域に、恵理自身が客体的に突き動かされ、彼女の主体的自我は後景に追いやられていくのである。「ここへ来た当初の目的はほんとうに口止めのためだったけれど、今となってはもうどうでもよくなってしまっていた」、「すでにどうしようもなくとろけきってしまった」。想定外の成り行きに自我の主体性を受け渡してしまい、欲動の奴隷になっているのだ。「しまっていた」のリフレイン……。『いい子』のペルツナは剥げ落ちているのである。

不思議だ。山本光秀のことは嫌いなのに、その体にはどうして嫌悪を感じないんだろう。している行為も、お互いの間に恋愛感情がないことも、あのサラリーマンの時とまったく同じなのに。

恵理が「不思議だ」と自己納得することが出来ないでいるのは、心の交流が何ひとつなく、愛情も抱けない、いや、人間的にはむしろ嫌いなはずの光秀の身体に嫌悪感を感じないことである。「あのサラリーマン」の舌が口の中に入ってくる感触を「ただただ気持ち悪く」感じた体験との相違。しかし、恵理が真に納得出来ないことは、「お互いの間に恋愛感情がない」異性とのセックスでありながら、サラリーマンとのセックスでは、気持ちが「どんどん萎えていった」のに対して、光秀とのそれでは、「どうしようもなくとろけきってしまった」、「心臓が止まりそうなほど興奮」したことであつたはずだ。類似した状況に対して、恵理の性の領分がまったく異なる応え方をしたことであつたはずだ。

しかし、恵理がここで想起すべきことは、都との体験であつたはずである。「都とのキスが素晴らしかったのは、私が彼

女を好きだからだ。彼女に恋をしているからだ」という経験の再定義。愛しさ・親密な感情を抱いている相手との身体的な接触だからこそ「素晴らし」さを享受出来たのだという認識。「ただただ気持ち悪く」感じた、「あのサラリーマン」とのキスとの相違によって、恵理が手に入れたはずの認識、相手が男／女には関わらない、性愛行為の本質であるはずだ。

サラリーマンとのセックスとの比較で、光秀とのそれを意味づけているようでありながら、恵理を真に戸惑わせているものは、「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていない」おのれのセクシュアリティであるはずである。「心のほうは女の子を求めていながら、体のほうは男の人を激しく求めてしまう」セクシュアリティ。都とのキスの体験によって分かっていたおのれの性的欲望の形を再認識しているだけとも言えよう。「心の欲望」をまったく感じられない光秀に対して、激しい「体の欲望」を感じてしまう自分自身を不思議がっているのである。愛情が介在しないセックスによって、「どうしようもなくとろけきつてしま」う自分に戸惑っているのだ。

都とのキスによって認識したはずの性愛行為の本質から乖離した光秀とのセックス。「体の欲望」が満たされ、「どうしようもなくとろけきつてしま」う行為ではあっても、恵理の心が満たされることはなく、事後的に、自己嫌悪感、空虚感を残す不毛な性行為でしかないのである。「心の欲望」から疎外され続けるしかないのだ。

「一晩限りの、あるいはセックスだけの関係なんてのはこれまで一度もなかった。いくらやりたい年頃だからといって、さかりのついた犬じゃあるまいし、動くものなら何でもいいというわけではないのだ」。光秀の自我に輪郭を与える自尊心……。光秀を光秀たらしめている生きる姿勢（ポリシー）のひとつであろう。しかし、このような自尊心、ポリシーに支えられている光秀とは、「あるべき自己」として、彼が仮構したいと願っている自己に過ぎないのではなからうか。そのポリシーが理念に止まらず、どれだけ光秀の精神の現実（生理）になっっているか、が問題である。恵理の攻撃的な挑発を拒否しようとする光秀の「あるべき自己」の位置の不安定さは垣間見えているのである。

なの……その自信は、いま初めてぐらつこうとしていた。それどころか、下半身から繰りかえし突き上げてくる欲望のあまりの激しさに当惑するほどだった。

光秀の「あるべき自己」(ペルソナ)は、現実の光秀によつて揺さ振られ、崩れ落ちようとしているのだ。建て前の自己が、自身の身体性・情念の現実によつて突き崩されかけているのである。「一晚限りの、あるいはセックスだけの関係」から自己分離するという生きる姿勢(ポリシー)がもともとポリシーでしかなかった脆弱さが露呈しているのである。「捨てちまえ、理性も理屈も捨てちまえ、捨てちまえ、捨てちまえ」という自己の性の領域の内奥からの呼び掛け、身体性の突き上げに自己放棄を迫られている光秀。

「そんなに男とするのが好きなら、やつてやるよ」、「あの男なんかより、もっと気持ちよくさせてやる」、「ごまかさなくていいよ、藤沢。取り引きだなんて口実だろう？　ほんとは俺とやりたかっただけなんだろう？」、恵理と自分双方を傷つけようとする暗い情念をデスペレートに発動させ、恵理と自分を性的人間の位置に貶めることによって、自分を鼓舞して、恵理に挑み掛かつていくのである。加虐・自虐の暴力的な情動、男性性の荒々しさを誇示する残忍さを仮構することなくしては、「下半身から繰りかえし突き上げてくる欲望」に自分を譲り渡すことが出来ないのである。「どうしても罪悪感を捨て去ることができない」でいる光秀、彼のなかで、超自我の機能が停止していないことは言うまでもあるまい。

藤沢恵理がすぐそこに、ちよつと手を伸ばせば届く距離にいるのを見ると、じりじりと体温が上がっていき、肌が汗ばんで、ただもう……やりたくてたまらなくなってくる。べつに彼女に惹かれてるわけじゃないのに、本来ならこんな気の強い女は好みじゃないはずなのに、どうしても今はこいつとやりたい、こいつじゃなくちゃ意味がない、恋だの優しさだの言葉だの、面倒な手続きなんかいっさい抜きにして、ただこいつの中に入れて、何も考えずに最後までつっ走りた、この熱い昂ぶりと苛立ちとを今、たったいま鎮めることができるなら、もう死ぬまで二度と

やれなくてもいい……。

「さかりのついた犬じゃあるまいし」という自尊心は姿を消し、動物的な衝動を截然とはね返すことが不可能になっているのだ。「あるべき自己」からの撤退を余儀なくされている光秀がいるのである。たとえば長続きする親密な関係性は築けなかったにしても、「気にいっていた」女の子たちとだけしかつき合ってこなかった、というのが、性愛関係における光秀の是認することが出来るポリシーであったはずである。その生きる姿勢の放棄を余儀なくされているのだ。性愛関係の前提として、たとえば「気にいっていた」という程度の感情の揺らぎであれ、なんらかの好意があるべきだという性道徳観を保持していた光秀。愛情という明確な心の形の手前の、「気にいっていた」という感情の揺らぎのやり取り、その感情の揺らぎの相互確認といった手続きを経由した後の性行為こそが、あるべき性愛行為だという性規範を抱いていたのである。だからこそ、そういう前提に立たない、そういう手続きを一切省略したセックスを恵理とすることは、自らを犬猫の位置に貶める卑しい行為だと感じざるを得ないのである。「惹かれていくわけ」ではない恵理。「好みじゃないはず」の恵理が相手なのだから。コミュニケーションすら成立していない恵理に向けられる、今までつき合った女の子たちの誰に対しても感じたことのない未経験の「強烈な性欲」。何故引き寄せられるのかその理由が分からない恵理の吸引力によって、未知の地平に連れ出され、「昂ぶりと苛立ち」を抑えられないのである。対自的存在でありながら、犬猫と同じ位置に自分を投げ出すしかない光秀……。

さもしくて、食欲で、底意地の悪い、もう一人の山本光秀。いったい今までどこに隠れていたのだらう。何かどうも黒いものが腹の底でとぐろを巻き、鎌首をもたげ始める。怒りにも焦りにも似たその感情が、藤沢に対するものか自分に対するものかすら、もうわからない。

性的身体であることを無防備に顕示している恵理を前にして、ペルソナ（「外向きの顔」）の下に抑圧されていて、自ら

も気づくことのなかった本当の自分に出会っているのである。「もう一人の山本光秀」とは、光秀の（ヘシヤドウ）、「明るい意識化された自分の反面に隠されている人格の暗い影の部分」だと言えないだろうか。「こころの中に秘めている自分の知らないもう一人の自分」。ペルソナの真实性を信じる足場を崩され、自分自身の不可解さに当惑している光秀。犬猫とそれほど遠くない「もう一人の自分」に直面して、狼狽し、苛立っているのである。「高校に入ってから、つき合った女は何人かいた」、女の子たちに深入りしない、「外向きの顔」だけで関われる希薄な人間関係しか持っていなかったがゆえに、「もう一人の山本光秀」に気づかずにいられたのだ。恵理の性の領域に強く牽引されることによって出会った「人格の暗い影の部分」、それに反応して性急に抱く自己嫌悪と自己否定の感情。そこには、「あるべき自己」を仮構したい希求が光秀に強く存在することが読み取れるであろう。自分の醜い動物性を恥じる対自的存在である光秀。「もう一人の山本光秀」を覗き見た光秀は、「あるべき自己」（ペルソナ）との間に、どのような折り合いをつけていくのだろうか。

窓を閉めきった部屋の中、それしか頭にならない動物みたいにもつれ合い、汗だくで上になったり下になったりしながら、僕らはいつも、あの最初の夜と同じように、互いを傷つける残酷な言葉を口にしあつた。とくに僕が彼女の欲求の強さに関してひどいことを言えは言うほど、彼女の体は激しく震えて僕を求め、僕に応えた。まるで、儀式だった。これがあくまでも「取り引き」であり契約であり、決してそれ以上の意味を持たないことを確認し合うための、それは、儀式だった。

彼の体さえあれば他は必要ないとまでは言わないけれど、私が求めているのはあくまでも、体あつての光秀だ。肉体ぬきの彼には用がない。

相互排除的な性行為の様相を呈しているのだ。優しさのやり取り、心の交流を相互排除し合った、「それしか頭がない動

物みたい」な者同士の「もつれ合い」の泥沼に足を取られていることは間違いない。

恵理の側には、そのような性交渉にのめり込んでいくことに複雑な動機があるわけではない。「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていない」恵理。その恵理が「取り引き」を隠れ蓑にして、「体の欲望」を満たしているに過ぎないのである。仮構された「取り引き」の存在意義は、自意識を眠らす自己催眠だと言えないだろうか。たとえ「取り引き」を反故にされても、それでも光秀とセックスしたい、という恵理の迸る性欲……。その恵理に「取り引き」を偽装させているものは、自我の輪郭を守ろうとする彼女の自尊心であろう。「いささか度を越してしまっている」性的欲求の強さを剥き出しにすることは、「恵理の自尊心（自我）が耐えられないのだ。「取り引き」のために光秀に身体を投げ出しているのだ、という建て前（言い訳）を必要としていただけなのである。したがって、光秀とのセックスに、心の交流、親密な感情を介在させないための防波堤として、「取り引き」を偽装する必要性は皆無なのである。もともと、「心の欲望」がまったく光秀には向かっていないのだから。

恵理との互いを傷つけ合いながらのセックスを「儀式」である、とことさら論う光秀の側はどうであったのか。恵理に「ひどいこと」の数々の言葉を投げつけるのは、そういう「ひどい」言葉を吐くことの出来る「ひどい」自分を演出することで、恵理の身体に向かう欲望をデスペレートに鼓舞するためであろう。しかし、そこには光秀自身気づいていない別の動機が混入しているのではなからうか。恵理の自我を傷つけることで、その性行為が単なる「儀式」ではないこと、「それ以上の意味」を持った行為であることを暴露したい衝動。光秀のなかには既に、「取り引き」ではない意味合いが混入してきているのである。「惹かれてはいるわけ」でもなく、好きなわけでもなかったはずの恵理。傷つけ合う、体だけの関係を重ねているうちに、光秀の心の奥底の襲には、恵理との間に心の交流、優しさのやり取りを望む欲求が生じているのではなからうか。

光秀が持ち合わせている女性観（世界観と言っても過言ではなからう）によって恵理を解釈しようとする時、彼女は謎の女性存在と化するのであるが、「藤沢恵理のわけのわからなさ」に光秀が当惑し、苛立つのは、当然の成り行きだと言えよう。誰かのことを理解したい、知りたいと願うのは、その誰かに対する愛の行為に他ならないのだから。恵理の身体に密着することで、性的快感の確かな手応えを掴んでいながら、愛の行為からは疎外されているのである。

僕には、藤沢恵理がわからなかった。

何がわからないとあって、いったいなぜ彼女がそんなに独りでいたがるのか、僕と馴れ合うことをなぜそこまで拒むのが、どうしてもわからなかった。

光秀はただ単に、恵理が解釈不可能だという事実だけを言明しているのではないであろう。体と体の関係以外の要素を排除しようとする強固な構え、光秀の心の介入をはねつけようとする堅固な心の防壁を恵理が築く理由が分からないことへの当惑、苛立ちを吐露しているのである。恵理のことを理解したい、「馴れ合う」関係性を構築したいという愛の願望が心の奥底に（明確に意識化されない心の形として）あるからこそその当惑、苛立ちであることは多言を要すまい。

いっそのこと、普通の恋人同士のように優しく合えればもっと楽になれるのにと僕は思った。べつに恋愛感情でなくていい。体の関係を持った男と女の間で普通に生じる、ただの親しみとか気安さでかまわない。せめてそういう情みたいなものをやり取りできたなら、後でいちいち最悪の気分にならずにすむんじゃないか。そう思ったのだ。

「互いを傷つける残酷な言葉」を投げつけ合うセックスが後に残す「ひどい気分」、「最悪の気分」から逃れようとする光秀がいることは確かである。心のつながりを排除した体だけの関係を続けることへの罪悪感、そういう行為が出来る自分の「ダークサイド」に向き合うことから逃走したいことも確かであろう。「ひどい気分」、「最悪な気分」の累積によって、自我の輪郭が崩壊することを防ぐ自衛手段として、恵理との関係性の改変を願っていることは間違いない。しかし、

そういう自己否認の逃避的な動機とは異質な欲望がそこにあることは明らかだろう。恵理を理解したいという希求に裏打ちされている親密な関係性への欲求。恵理に対する愛情要求という恋愛心理の胎動、恵理に向き合う光秀の心にそれが前景化しているのである。

いのに。 どうして私を理解しようなんて思うんだろう。私のほうは、光秀に理解されたいと思ったことなんか一度だってない。

光秀の心の奥底で蠢いている恋愛心理を拒絶する恵理。「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていない」自らのセクシュアリティに自然体で従っているだけかも知れない。「心の欲望」をまったく掻き立てられることのない光秀を、体だけの関係性に取り込んでおくことに不自然さを感じていない恵理。「いつも、光秀が誘ってくるのをじりじりしながら待つて」いながら、心のコミュニケーションを拒絶するスタンスを崩そうとはしないのである。光秀に理解されたい、という愛の心理とは無縁な位置で光秀に関わっているのである。光秀の理解を拒む意識が彼との距離を作り出しているのである。光秀の心と交差する機縁が不在であるかに見える。

今のところ私が主導権を握っていられるのは、光秀が私を理解できずにいるおかげだった。あるいは、光秀が私に恋愛感情など持っていないことがわかるからこそ、私は自分の欲望に正直でいられるのだった。彼の前でだけは、装う必要がなかった。優等生でいる必要も、いい子に見せる必要もなかった。

いずれにしても、私はたぶん、光秀に救われているのだった。というか、光秀が私のところまで墮ち、そのうえで私に執着していることに救われているのだった。彼がその状態にある間は、私は最後のプライドを保っていられる。執着の対象に同情するなんて真似は、彼にも、誰にもできないはずだから。

光秀の心の裏を見誤っているのであろうか。そうではあるまい。光秀の心の奥底に蠢いている恋愛感情からあえて目を逸らそうとしているのではあるまいか。「互いの気持ちを通じ合わせ」てしまえば、二人の関係が恋愛めいたものになってしまう、そうならないための防壁として、光秀の側の恋愛感情の不在を措定する必要があったのだ。我々は、恋愛関係、あるいは、それ以前の親密な男女関係のなかでは、本当の自分（「ダークサイド」）を隠蔽して、「外向きの顔」を見せなければなるまい。自分を「いい子」に見せる自己演技を余儀なくされるであらう。恵理は、光秀以外の対人関係において、自己嫌悪に陥りながらも、「いい子」のペルソナから離れられなかったのである。「いい子」の仮面の下に、「ヘテロとしての性的欲求の強さに関して、いささか度を越してしまっている」セクシユアリティを隠蔽することに疲れ、二重人格者のような自分に自己嫌悪を持ち続けざるを得なかったのである。だからこそ、光秀（との関係性）に救われていると言えるのだ。「互いの気持ちを通じ合わせ」ることを排除することで作り出された、体と体だけの関係性、ここでは、「いい子」の自己演出は、場違いで無価値な演技でしかないのである。恋愛関係ではない、「体の欲望」だけを満たし合う関係においては、「いい子」のペルソナは不必要なのだから。光秀の前では、「いい子」である必要がないのだ。

光秀の心の奥底に蠢いている恋愛感情を故意に誤読（無視）することによって、彼を自分と同じ性的人間に仕立て上げようとしているのである。その光秀との共犯関係で、体だけの関係を構築し、そのなかでペルソナを取り外すことが可能になっている恵理。光秀との関係のなかで、ペルソナの重圧から解放された安堵感を得ているのである。光秀との体だけの関係を度外れに欲望する自分を許せる気持ちになることが出来、自分のシャドウ（「ダークサイド」）と和解する時間に恵まれているのである。

自己是認の道具として光秀を利用しているだけのように見えるかも知れないが、恵理の心は微妙な揺れを抱えて動いているはずである。「私はたぶん、光秀に救われているのだ」という恵理の安堵感、解放感、恵理との間に「普通の恋人同

士のよう」な関係性を希求する光秀の心理と微妙に呼応していることは言うまでもあるまい。「私が求めているのは、彼の心などではないのだから」とあえて言挙げするのは、それと反対の心の傾斜、光秀の心を求める欲望が生じている恵理の心の現実を否認するためである。それを否認しなければ、「光秀に救われているのだ」という安堵感が得られないのだから。とは言え、都へと向かう「心の欲望」に特別な変化が生じたというわけではないのだ。

その意味では、光秀の心を求める欲望は、恵理のなかで明確に意識化された情念として定着しているとは言えないのである。

都の赤い唇を見つめる。いつものように、あの時のキスの感触がよみがえってきて、心臓が苦しいくらい収縮する。ただそれだけのこと（恵理の呼び掛けで、都が振り向いたこと）がこんな嬉しいなんて、どれほど都からの温かさに飢えているか思い知らされる。

「いささか度を越してしまっている」「体の欲望」を光秀の身体によって食欲に満たしているのとは別次元の欲求が都を求めさせているのである。「心の欲望と体の欲望」とがシンクロしていない。恵理においては自然な欲求であろう。「恋愛の志向だけとってみればトランスセクシャル」である恵理の欲望は、光秀とのセックスによっては埋められないのである。反復される光秀とのセックスの体感によっては、都としたキスの体感・心の昂揚感を打ち消してはいなかったのである。愛しさが込み上げてきた結果としての都とのキスが恵理の欲望を最高度に満たしたのは当然であったのだ。その感触、心の昂揚感が今も鮮明に蘇って恵理を息苦しくさせているのである。「唯一無二にして絶対」の存在である都の唇に触れたい、都に思われたい、という欲望が、窒息しそうになるほどに渦巻いているのだ。心の関与を排除した光秀との関係の裏返しとして、都との関係性では、親密さのやり取り、「温かさ」のやり取りのほうに欲求のウェイトが置かれているのであるが。

「心の欲望」を都に露わには投げ掛けられない恵理は、愛情飢餓感に陥っているのである。

「恋愛の志向だけとってみればトランスセクシャル」の恵理の都へ向かう心の動きが、ヘテロセクシャルの男女間の恋愛心理と同じものであるのは当然であろう。都に「恋をしている」のだから。都が鷺沢隆之と「二人きり」で話していたことを光秀から聞き取った恵理……。

鷺沢くんを心配して？ それとも、彼と話をするために？ だとしたら、何を、どんなふうに話したのだろう。私には話さなかったことでも、彼になら話せるのだろうか。

激しく嫉妬している自分に気づいて、私は血が出るくらい唇をかんだ。

愛する者を排他的に独占しようとする恋愛心理。都の心を自分に引きつけておきたいのであり、都が自分の領域から離れて、都独自の世界で生きることを認めたくないのである。愛する者のプライバシーに嫉妬の想像力を向けて穿鑿し、自虐的に身悶えする恵理。恋する心と嫉妬心は背中合わせなのだ。嫉妬している自分を抑えることが出来ずに、苦しみ、苛立つしかなす術がないのである。光秀との関係を切り離れた地点で、恋の煩悶に突き動かされる恵理。光秀との心の旅において、恵理のこのような心の傾斜に変化は生じるのであろうか。

「それ、運ぶのか？」、「手伝ってやるよ」、「遠慮すんなって」、セックスに誘う「いつもの用件以外」の言葉を恵理に投げ掛けて、恵理を驚かせた光秀。光秀の心のなかで地殻変動が起こっていることは明白である。

裸になってすることに関しては何一つとしてタブーがないのに、いざそれ以外の部分で向き合おうとすると、僕は途端にうまうまなくなる。

不自然だった。いつまでもこんなことを続けていていいはずがなかった。一日も早く終わりにするべきなのだ。

心のコミュニケーションが不在の体だけの関係に終止符を打つべきだと思う光秀、恵理の身体によって自分の性的欲求

を満たすだけの体の関係から抜け出すべきだと考える光秀がいるのだ。無論、恵理との関係性そのものを終わらそうとしているわけではない。心を関与させないセックスを反復することを「不自然」だと考える裏側には、セックスの反復に見合うだけの親密な感情のやり取りを恵理との間に切実に希求する愛情欲求があるはずである。体の関係を終わらせることによって、プラトニック・ラブを現前させたい願望。優しさの交換、相互理解という恋愛行為を望んでいるのである。恵理の心に触れたいのである。無論、「まだ足りない。全然足りない。今すぐ彼女を抱きたい」という激しい性衝動に突き動かされる「僕の中にいるもう一人の僕」も同時存在しているのであるが。

恵理の心に触れたいという欲求が光秀に気づかせた心の空洞、寂しさ……。「つき合った女なら何人もいたけれど、真剣な恋をしたためしはまだ一度もない。そのことの寂しさに、いま突然気づいてしまった」。恵理の心に向かおうとする精神的営為が、対人関係の上澄みだけを掬い取るように生きてきたことの空虚さ、不毛さに気づかせたのである。この空虚さ、「一人きりだ」という痛みを伴う寂しさを恵理の心によって埋め合わせたいと切実に願う光秀。

取り引きだの契約だのという口実を盾に、あれだけ彼女を好きにしておきながら虫のいい話だけけど、せめて一度くらい笑った顔を見せてくれた方がいいじゃないか、そう思った。藤沢に対しても口に出して言いたかった。俺、お前のこと全然嫌いじゃないよ。お前が友達と笑ってる時の顔、結構好きだよ。本当に言いたいのはそのような種類の言葉だった。なのに、どうして僕は言えないんだろう。違う、どうして彼女は僕に言わせてくれないんだろう。

恵理に差し向ける思いと、自分に向けられる恵理の思いの落差に失望し、苛立ちながらも、なおかつその落差の消失を願う光秀。「僕の中にいるもう一人の僕」の性衝動を棚上げして、恵理の笑顔を要求するのは身勝手な願望ではあろう。しかし、光秀がまさに恋愛関係の磁場に進み出ていることは確実なのである。恋愛関係とは、双方向的な心のやり取りによって成り立つものであり、双方向的な優しさのやり取りが出会う磁場に発生するものだから。恵理の笑顔（好意・優しさ）

を求め、自分の好意を伝えたいのである。心と心を触れ合わせたいのである。しかし、「体の欲望」だけで光秀の身体に関わっている恵理にその愛情欲求を拒絶されて、深い困惑と虚しさを抱え込まざるを得ないのだ。しかし、恵理と心を触れ合わせたいという愛情欲求は、光秀をそこに立ち止まらせないのである。

初めのころは、藤沢恵理と会うたびに混乱させられた。学校でのあの優等生ぶり、僕の前で見せる乱れた姿とが、どうしてもうまく重ならなかった。でも、今ならわかる。どちらが本当の彼女なのか、ではなくて、そういう區別をしようとする事自体がナンセンスだったということが、だ。

自分の思考枠組みに居座って、恵理を二分法で解釈しようとするのは、自分の自我の輪郭を保とうとする自己愛（自分に対する甘え）に過ぎなかった、ということに光秀は気づいたのである。光秀の思考枠組みに恵理を囲い込もうとするところが、恵理を窮屈に窒息させることにつながる、ということが分かったのである。そういう二分法の解釈を捨てて、どちらも本当の恵理だと理解すること。「学校でのあの優等生ぶり」（ペルソナ）と「僕の前で見せる乱れた姿」（シャドウ）の揺らぎに共振しつつ、その全体性において恵理を受け止めること。それこそが、「何よりいちばんいやなのは、この私が、そういうあれこれを優等生の仮面の下に隠して、平気ですらばっくられて笑っていられる人間だ」という事実だった」という恵理の、ペルソナとシャドウの狭間で苦しむ自己嫌悪に共振する道であるはずである。

恵理への共感に連動して導き出された、「そのどれもが違う僕であり、しかもすべてが同じく僕なのだ」という正確な自己認識。「自分の中の嫌いな面」と「好きな自分」との両方を見据えつつ、「まるごと受け入れるしかしようがない」という自己定位。その自己認識、自己定位には光秀の確実な成長が見られるのである。自分に対する甘えと決別した光秀。光秀のこの成長が、恵理との関係性を変えていかなければならないし、恵理がその光秀の成長に反応しないはずもないのだ。そして、光秀のこの成長が、父親の人間性の奥行き、心の機微を見いださせるのである。「意外だった。おふくろが、僕ら

を捨てて家を出たことに負い目を感じてたなんて。もしかして——親父はそれを知っていて、おふくろに頼みごとをしてやったのだろうか。

恵理に共振したい、恵理との不自然な関係を改善したい、という光秀の希求が叶う展開、『海を抱く』のストーリーはどのように仕組まれているのである。三年前に家を出ていったきりの恵理の上の兄（アキ兄）、恵理がその兄に与えるお金を光秀から借りる、というプロットを村山由佳は仕組んでいるのである。体と体の関係に、お金の貸し・借りという新たな関係が加わったのである。「お金はもちろんだけど、この借りはちゃんと何かで返すから」と明言していたその借りを返そうとして、光秀から要求されてもいないのに、光秀の部屋に来て、身体を投げ出そうとする恵理。「や……やめろよ」、「よせたら。返すのは金だけでいいって言ったろ」、「相手がしてほしくもないことをしたからって、借りを返したことにほならないよな」と畳み掛けて、恵理の強引な体の押しつけを押しとどめようとする光秀。光秀のなかにそれに反応する性欲の波立ちがないわけではないのだが、お金を貸すという親切（愛情行為）を体で返されることには耐えられないのである。思いやり（心）には思いやり（心）で応じてほしいのである。

「してほしいこと、一個だけある」、「話」、「話をしてほしい」、「お前さ」と畳み掛ける光秀。眉をひそめる恵理に構わず、自分の思いを言葉にし続けるのである。

「お前についての話が聞きたい」僕はかまわず言った。「お前の家族の話。友達の話。飼ってる動物の話。小さいころの話。バスケの話。何でもいい。お前に関する話ならどんなことでもいいから、聞いてみたい」

愛する者が相手に差し向ける心の動き以外の何物でもない。貸しがある者の優位性を放棄して、むしろ弱者の位置から懇願しているのだ。特別な秘部の開示を迫っているわけではない。どんな些細なことでも恵理の断片のあれこれを知りたい、話してほしい、という親密さの要求。恵理のあれこれ打ち明けてもらいたいのは、恵理から特別な存在として価値

づけられることを願っているからである。体だけの関係しかない恵理に対して、何気ない自己開示を求めるのは、恵理との関係性の質的転換を実現させようとする飛躍に自己投企しているのだと言えよう。恵理の領分を共有することで一体化したい、という恋愛心理。

「ふざけないでよ」、「どうしてそんなことあんなに」と、素気なく愛情要求を拒絶される光秀。しかし、彼は、「借り」、「返してくれるんだろ?」、「——いいから、話してみろってば」と、不本意ながら、「自分の中の嫌いな面」まる出しの、相手の弱みに付け込む暴力性で恵理に話すように迫るのである。

強くならみ返してやる。無駄話なんかしてないで、さっさと抱いてくれればいいのに。私はそれが欲しくてここへ来たのに。

恵理は「借り」を体で返すために光秀の前にいるだけかも知れない。いや、それを隠れ蓑にして、「体の欲望」を満たそうとしているだけかも知れない。意識的にはそうであつただろう。光秀との間に、体の関係以外の何物をも持ち込むまい、という固い防御姿勢をとっていることに変わりはないようである。しかし、恵理の意識の奥底に、光秀のぎこちない愛情要求に共振する何かが蠢いていなかったとは言えないのではないか。いや、無理強いされて自分を語っているうちに、その何かが蠢き出した、と言うべきかも知れない。

さつきから打ち明け話をさせられている間じゅうずっと、光秀のほうを向いて話すことがどうしてもできない。なんだか気持ちまで向かい合っているかのように誤解されそうだから、というより、うっかりすると私自身が勘違いしてしまいそうだったからだ。

これまでさんさん抱き合つて身体をつないできた間は平気でいられたのに、普通に話をするのがこんなに恥ずかしいとは思わなかった。おまけに、こんなに無防備な心地のするものだなんて。言葉はまるで、相手にさしだす人質み

たいだ。

強要された自己開示。「体の欲望」に突き動かされて、身体だけを光秀に関わらせていた関係性に羞恥心を抱くことがなかったのは当然であろう。心を身体の外に追放していたのだから。心が不在の身体を裸にすることには羞恥心を感じなかったのである。しかし、心を裸にして向き合うことは恥ずかしいのだ。光秀の前で自尊心を守るために作作的に仮構していた構えを捨て去り、素顔を無防備に差し出すことを恥ずかしがっている恵理。身体を顕わにすることよりも、自己の内面を顕わにすることのほうに抵抗を感じるのはよく分かる。言葉（内面）を差し出すことの恥ずかしさとは、たとえば、化粧を落とした素顔を他人に見せる時の恥ずかしさに似た感覚であろう。

心と心で向き合うことの恥ずかしさ。恥ずかしいという感覚こそが、親密な真の関係性を生起させる導火線であることは間違いない。羞恥心は恋愛感情の前提となる心の動きであるはずだ。恵理について知りたいという光秀の愛情要求に、恵理はまだ意識的には共振しようとしているのではないのかも知れない。しかし、裸の心を光秀に差し出したことが、恵理を思いがけない地平に連れ出すのである。恵理が意識の奥底で、その地平に自ら歩み出たいと願っていたからである。うが……。

ふと気づくと、光秀の指が私の肩先をそつとなぞっていた。たぶん無意識にしているのだろう、その愛撫には性的な匂いがまったく感じられなかった。

でも、だからこそよけいに親密な行為に思えた。その親密さを苛立たしく思う気持ちと、気づかないふりで身をゆだねていたい気持ち私の中で入り混じる。そんな馴れ合いなんかさっさとふりはらえばいいのに、なんだかちよつと惜しいような、もう少しだけこうしても別にかまわないような気がして、なかなか踏んぎりがつかない。

恵理のことを知りたい、恵理の心に共振したい、という心の重なりを求めている光秀の愛撫に性的な匂いがなかったで

あろうことは頷ける。親密さを排除した体と体の関係だけを求めていたはずの恵理が、光秀のその愛情表現に共振してしまおうとする衝動に駆り立てられているのである。「契約」の履行として体を差し出しているのだ、という建て前（光秀の心を侵入させないための構え）を半ば崩しているのは明白だ。その崩れかけた構えの隙間から、心の奥底で渦巻いていた親密さをやり取りしたいという欲求が顔を覗かせているのである。

心の構えを維持し切れなくなった自分のことを、「いつのまにかこんなに弱くなっている」と自己否認するのは、自分の本心に気づくことで自我同一性が崩壊することを回避したいからであろう。恵理は「弱く」なっているのではない。「言葉どころか、私自身をそっくり差し出してしまいう」という、光秀と裸にした心で関わりとうとする恵理が誕生しているのである。「心の欲望」が異性には向かないはずの恵理。光秀に心を委ねていたい欲求に突き動かされている自分に気づいて当惑し、そういう自分に抵抗を感じているのである。その意味で、恵理は自我の再編成を迫られている、と言えるのである。

私はやがて、体から力を抜いた。光秀の腕の重みを感じた。背中をびったりと覆っている彼の胸がひどく温かい。恵理と光秀の新たな関係性の生起が象徴的に描かれている、と言えないだろうか。恵理のこうした心の動きを理解するために、愛とは何かの定義をここですることにさしたる意義はないであろう。恵理の心模様は愛と呼べるか否かの穿鑿は不要であろう。愛の定義を先にして、その後で愛する決意を固める者などほとんどいはずだから。自分の心の揺らぎが何であるか定義出来ないまま、事後的に愛という言葉でラベル貼りすることになる心の現実を追認することしか我々には出来ないのである。

「体から力を抜いて、光秀の身体の重みを受け止めた恵理、その恵理の心の機微に急いでラベル貼りをする必要はない。光秀に対する自尊心を守る自己演技（心の構え）を自己放棄し、心を裸にして彼を受け入れている恵理の心の現実を

確認しておけばいいのだ。体の力を抜いて、光秀という存在の質量感をその温かさとともに受け止めた恵理。二人が融合し、一体化していることは間違いない。恵理と光秀の歪んだ関係性のその歪みが修正されていることは確実である。

この新たな関係性の深化を後押しするために、作者・村山由佳が、恵理の兄の逮捕というプロットを仕組んでいることは明白である。(拘置所に差し入れを持って行くために) 学校を休んでいた恵理を気づかかって、彼女の家にまで行かずにはいられなかった光秀。「私がショックで寝込んでるでも思った？ 駆けつけてくれたあんたの顔見たら、抱きついて泣き出すとでも？」、「そういうの期待して様子を見に来たんなら、残念でした、明日は平気な顔で学校行ってみせるわよ」と憎まれ口をたたく恵理。裸にした素の心で光秀を受け止めた恵理とは別の、逆戻りした恵理がいるようである。しかし、彼女は実は、「(アリガトウ)の一言」が素直に言い出せない自分に苛立っているだけなのである。光秀の思いやり、優しさに対して、感謝の心を素直に返せない自分への苛立ちから、彼に八つ当たりしているだけである。恵理には、光秀に対する甘えと安心感があるのである。可愛げのない憎まれ口が、本心とは反対の単なる言語表現に過ぎない、ということも光秀がちゃんと分かってくれている、という安心感と甘え……。

「どうもね」

光秀は、歯を見せずに笑った。

ぎこちない感情のやり取り。しかし、二人にはこれだけで十分だったはずである。恵理の兄の逮捕という外的偶然も、彼らの関係性を深化させる機縁となつていたのである。これ以後、学校生活の中でも、心のコミュニケーション、親密さのやり取りを、同級生たちの視線の交錯から隠そうとはしなくなるのである。

藤沢は靴をげた箱に入れながらそれに答え、そしてふと気配を感じたのか、こっちを見上げた。切れ長の目がみひらかれる。

僕は、黙って片手をあげた。

藤沢が、ためらいがちにうなずいた。

「何だよ、お前ら、いつのまに？」と友達から追及される関係性、同級生に周知の男女関係に二人は進み出ているのだと言えよう。兄の逮捕が学校中の噂の恰好の餌食にならないわけがない。無遠慮な視線とひそひそ話の渦の中に孤立化する恵理。そうした恵理を気づかして、「休み時間になるたびに」、彼女の教室に足を運ばずにはいられない光秀。

そういう中で、私の気持ちのよりどころになってくれたのは、都と、もう一人——認めたくはないけれど光秀だった。(中略)まとまった話こそしなくても、たまに廊下ですれ違ひ光秀が短い言葉をかけてくることに、私はいつの間にか慣れ、ふと気づくとそれを待つようにすらなってしまうていた。

かつて、光秀の部屋で、「性的な匂いがまったく感じられな」い愛撫の仕方、恵理の「肩先をそつとなぞっていた」光秀と、「体から力を抜い」て、「光秀の腕の重みを感じた」恵理。この時の二人は、成り行きに促されて、ほとんど無意識的に親密な融合を遂げることが出来ていたのである。今の二人は、意識的な行為として、親密な心のやり取りをする磁場に進み出ているのだ。相手のために何かをせずにはいられない心、その心を待ち望んで受け止めたい心。光秀と恵理の関係性は、男／女の恋愛関係そのものと言う他あるまい。都へと向かう恵理の「心の欲望」が夾雑物として残るのであるが……。

原因は、見当がついた。お互いを憎んでいるふりがうまくできなくなると同時に、二人とも、いったいどんなふうにか抱き合えばいいのかわからなくなってしまうのだ。

恋人同士のように、体のすることに感情がびったり重なるわけじゃない。かといって今となってはもう、体のすることから感情をまったく切り離しておくこともできない。彼を見つめ返す時、以前なら視線にトゲや嫌悪をてんこも

りにすることができたのに、それすらも難しくなってしまうていた。

「取り引き」としてのセックスという身振りが不可能になっていく心の現実に当惑しているのである。そして、恵理は、心の変化、いや、セクシュアリティーの変化というべき新たなで不可思議な自身の現実に直面しているのである。「心の欲望と体の欲望とがシンクロし」ていない自身のセクシュアリティーに苦悩していたはずの恵理。その彼女が、「今となつてはもう、体のことから感情をまったく切り離しておくこともできない」と自己言及しているのである。恵理の心身の奥底で、「心の欲望と体の欲望とがシンクロし」かけているのではないのか。「体の欲望」に連動して、「心の欲望」も光秀に向かいかけているのではないのか。

(あんななんか、要らない)

そう言つてやるつもりで、息を吸いこむ。

「あんななんか……」

と、ふいに——本当に、ふいにだった——目頭が焼けるように熱くなったかと思うと、ぼろぼろぼろっと両目から何かがあふれ出た。

「あんたしか、いないんだもの！」

「けど、しょうがないじゃない！ 嫌いだって何だって、他にいないんだからどうしようもないじゃない！……あんなだけなんだもの……私が全部見せられるの……何も隠さないでいられるの、悔しいけど、あ……んたしか、いないんだもの……」

「わかつてる」光秀が私の肩に頬を押しつける。「ばかだな、お前。んなこと、とつくにわかつてるよ」

恋愛感情がどういふ感情であるかという定義があるとして、この時の光秀と恵理を突き動かしている感情が、その定義に合致しているか否かの穿鑿は不要であろう。涙があふれ出るのを止められないまま、恵理が吐き出した言葉。彼女の口をついて出てくる言葉は、選択の余地のない切実な関係性を希求する心の叫びだと言っても過言ではあるまい。自己の存在に光秀が絶対的に必要不可欠であるという切実な思いを吐露しているのであり、だからこそ、恵理はその自己開示に、「後悔で、叫び出しそうだった。安堵で、息が詰まりそうだった。」と思わざるを得なかったはずである。光秀を好きだという感情というよりも、自己存在に光秀が必要であり、彼に依存して救われたいという切実な思いである。「汚らわしい動物」のような本当の自分を、「いい子」、「優等生」の仮面で隠す自己演技に疲れ、自己嫌悪に苦しんでいた恵理。仮面の抑圧から解放され、本当の自分を曝け出すことが出来る光秀との関係性……。彼女は自ら知らずして、光秀への愛を吐露しているのだと言うほかあるまい。

「くそ、なんかうまく言えないな。けど俺、どういうわけか、他の女じゃ駄目なんだ。お前以外の誰も、欲しくないんだ」

ズキリとしたのは、心臓のあたりではなかった。体の芯の、あれをしている時にいちばん熱くなるのとちようど同じ場所だった。疼くような甘い痛みがそこに走ったとたん、思わず声もれそうになったほどだ。

光秀から強く求められているという感覚がそうさせたのかもしれない。求められているのが私の心ではなく体である以上、そこに痛みを感じるのは当然のような気がした。あるいはまた、彼の言葉を受け止めたのが心であるにもかかわらず体が痛むのは、その二つが別物でないことの証のようにも思えた。

たった一人の女性として、恵理（の身体）を必死に求める光秀の言葉。彼の言語表現の表層をなぞれば、恵理の身体に

対する強い性的欲求を言明しているだけのようにも見えるかも知れない。しかし、光秀は、心／体の二分法によって、恵理という存在を捉えているわけではない。心身不可分の存在としての恵理、「お前以外の誰も、欲しくないんだ」とは、そういう恵理を心身の奥底から必死に求める切実な叫びなのである。

恵理に地殻変動が生じていることは確実であろう。「心の欲望」と「体の欲望」とが乖離していることに苦しみ、自己否定感に苛まれていたはずの恵理。彼女は光秀の言葉を受け止めた時、この自己否定の袋小路からの脱出口に立っていたはずである。光秀の〈言葉〉に、「心臓のあたり」ではなく、「体の芯」で反応してしまった時、心と体に切り分けられない存在である自分、心と体とが別物ではないことに気づいたに違いない。「彼の言葉を受け止めたのが心であるにもかかわらず体が痛むのは、その二つが別物ではないことの証のようにも思えた」瞬間に、恵理の心身の奥底で、「心の欲望と体の欲望がシンクロ」していたはずである。

自己存在をまるごと光秀から強く求められたことで、「心の欲望と体の欲望がシンクロ」した恵理。新たに生じたこのセクシュアリティは、恵理に、体だけの光秀ではない、「彼自身」を必要とさせたのである。「決して恋などではないけれど、恋でさえ、この執着にはかなわないかもしれない……。恋／性欲という二分法が意味をなさない領域で、恵理は光秀を不可欠な存在として強く求めているのである。「決して恋などではないけれど」、恵理の意識にとってはそうかも知れないが、恋という心の蠢きに青臭い過剰な価値づけさえしなければ、恵理の光秀に対する「執着」が、他者と共振しようとする真摯な心の働きであることが明白になるであろう。

「許してくれたってさ」

「だから、何をよ」

「その……だからつまり、お前に優しくすんのをだよ」

——お前に優しくすんのをだよ。

やがて、私は重たい腕を持ち上げ、光秀の頭を抱きかかえた。少しして、彼の肩や背中からこわばりが抜け落ち、私の上にかかる重みが増した。

彼の髪をそっと梳く。彼が、くぐもったのど声をもらす。

恵理は光秀の前で、完全に武装解除しているのだ。光秀の心を排除して関わろうとする爪先立った構えを取り払った自然体の恵理……。心の鎧を取り外しているのだ。光秀もまた然り。強がりもプライドも捨て去って、恵理と対等な立場に立って、優しくすることを許してくれと懇願しているのである。恵理と同じ位置にいようとすると共感性の発露。恵理を愛する心の働き以外の何物でもあるまい。光秀の言葉とともに、彼の体の重みをしっかりと抱き止めた恵理も、自然体の心で、光秀と共振していることは確実である。

恵理と光秀が互いに必要不可欠な存在になったのには、他の要因もあったはずだ。

僕らはもう、いやというほど思い知っていた。犯した罪に対して、ふさわしい罰を与えられずにいるのは、苦しい。そしてまた、正しくその人間を罰することができるのは、正しくその罪を知る者だけだということを。僕には、恵理。恵理には——僕しかない。

「ダークサイド」を隠し持っている醜い存在であったこと、性的欲望の権化であったこと、シャドウに促されて他人に言えない営みを重ねてきたこと、こうした一切のことを、互いに認め合い、互いが互いの神になって、その罪を許し合おうとしているのである。自分の負の部分への処罰によって、より深く救済されたのが恵理のほうであったことは、彼女が見せた「すがりつくような目」が示しているであろう。「あの晩のこと（「知らない男と寝てお金までもらった」こと）を、私は、たとえば都には絶対に言えない。このさき誰か他に好きな人ができたとしても、その人にも言えない。親にも、そ

していつか生まれないとも限らない自分の子供にも、やっぱり言えない」。作者・村山由佳は、恵理を性規範のダブル・スタンダードに強く緊縛された女性として描いているのだ。恵理は性規範のダブル・スタンダードを自ら内面化して、性的逸脱の苦悩を「未来永劫の後ろめたさ」を伴うものとして重く背負っているのである。

「僕には、恵理。恵理には——僕しかいない。」ことを相互確認した二人は、その後のセックスにおいて、「深く、もっと深く、同化する」という心身の一体化を遂げるのであるが、恵理のセクシュアリティが光秀に一元化されたわけではないのである。

目の前でサーフィンをしている光秀を眺めながら、恵理が回想する「数日前」の都との触れ合い。ピアノを弾いている都の横顔を「息をつめて」見つめていた恵理。

卒業したら、こうして毎日会うこともできなくなるのだと思ったら、その（都の）まつげの一本一本や、指先の奏でる音の一つ一つまでが、涙が出るくらい愛しかった。（中略）彼女を持っているもの、彼女につながるものすべてが、愛しくてたまらなかった。

私は、そっと手をのばした。祈るように息をつめて、都の頬に、触れる。
彼女はじっとしていた。

震える指を、少しずつすべらせていき、唇に、触れる。
都が私を見つめる。

ひたむきに、まっすぐに見上げてくる。
そうして——やがてささやいた。

(……いいよ)

恵理の「心の欲望」が依然として都に向かっていることは明白である。恵理のセクシュアリティの対象が都であることは間違いない。しかし、光秀とのあの「深く、もっと深く、同化する」といった融合の時間が無効化されているわけではない。サーフィンする光秀をそっと目で追う恵理、彼女の「心の欲望と体の欲望がシンクロ」したセクシュアリティが光秀を求めていることは、もはや動かない彼女の現実なのだ。恵理はそのことを前提にして、都との触れ合いを回想しているのである。都との別れ、都との関係が終わることを予想するがゆえの感傷、都への愛しさに浸っているのである。都が、「いいよ」とキスを許すのも、恵理との関係の終わりを前提にしての思いやりの行為である。都とのキスの体験は、もはや思い出の領域に属しているのだ、と言えよう。

「横須賀の久里浜から内房の金谷」へ向かうフェリーに偶然乗り合わせた光秀と恵理、その船路は、互いに自己嫌悪しかもたらさない歪んだ暗い関係性の始発点とも言える同道であった。『海を抱く』の結末の二人は、同じフェリーでその逆のコースを辿るのである。最初のフェリー上での関係性を無効化して、二人の関係を新しい意味合いに塗り替える旅立ちであるはずだ。既に生起している二人の新しい関係性を相互確認するための、心弾む親密な船路だと言うべきかも知れない。

恵理から手渡された夏みかんを海に投げつけた光秀、「光秀が投げたみかんのなるべく近くに落ちるように、力いっぱい投げた」恵理……。

二つの夏みかんは、波に揉まれてくっついたり離れたりをくり返しながら、ゆっくりと後ろへ流れていく。

海原に浮かぶ「二つの夏みかん」が、光秀と恵理を表象していることは言うまでもあるまい。睡み合うかのように、じゃれ合うかのように、「くっついたり離れたり」しながら波間に浮かぶ「二つの夏みかん」が表象している光秀と恵理の呼吸

の合つたりズミカルなパートナー・シップ。光秀と恵理の関係性の行方を暗示した色鮮やかなエンディング・シーンだと
言うべきであろう。

4 〈海を抱く〉・その意味するもの

海は、光秀にとって、「挑むものであり、永遠に対立するものでしかない」ものであったのだ。「波に乗るのは僕にとつて、限りなく自然で、しかも不可欠なこと」として、子供の時からサーフィンに没入して、波(海)を自在に操っていたかのような光秀、しかし、彼は海から決定的に疎外されていたのではないのか。「波と自分。自分と波。それで終わり。」という海との関わりにおいて、彼は海と融合し、海に抱き止められていたわけではないのだ。「挑むものであり、永遠に対立するものでしかない」という、能動的な力によって征服しようとする男性原理。海とこのような関わりしか持てない光秀は、海から拒絶され、決定的に疎外されていたのである。光秀の生きていることの空虚感、苛立ちの根源的な要因はここにあつたはずである。

恵理はどうなのか。

「お前、」かすれた声がくり返した。「海と……」

やがて、私が生まれて初めての昂まりに息をつまらせ、足先を引き攣らせて悲鳴をあげる瞬間まで、山本光秀のその言葉は、朦朧とした頭の真ん中でくり返し響きつづけた。

——お前、海とおんなじ味がする……。

「海とおんなじ味がする」という恵理……。恵理(の身体)と海との重なり(同一性)を光秀がいちはやく感得してい

るのだ。光秀が拒絶され、決定的に疎外されていた海、恵理はその海そのものだと言うのであろうか。光秀に抱かれることで、「どうしようもなくとろけきつてしま」い、「心臓が止まりそうなほど興奮している」恵理。性的恍惚感に自我を解き放っている恵理、そういう恵理（の身体）こそが、「海とおんなじ味がする」というのであろうか。

深く、もっと深く、同化する。

寄せては返す波に似たうねりが、僕を受け入れ、翻弄し、漂わせる。

海を、抱いているような気がした。

違う。

彼女が、海を抱いているのだった。僕にとつては挑むものであり、永遠に対立するものでしかないあの海を、彼女はいともたやすく体の中に抱いているのだ。

光秀にとつて、恵理（の身体）と深く同化する行為は、波（海）を操る行為（サーフィン）に似ているのである。光秀を「受け入れ、翻弄し、漂わせる」恵理という波（海）……。しかし、彼は、恵理という海を、客体化して操ることで、征服（支配）しようとしているのではない。海との関係性の経験の再定義の機縁に恵まれ、海の意味が光秀の中で変容しているのである。優しさのやり取りであるセックス、深く同化するためのセックス。この時の光秀は、「挑むものであり、永遠に対立するもの」である海からものはや疎外されてはいない。恵理という海に同化し、海を抱いているという安堵感、解放感に恵まれているのだ。恵理を抱くことで、海を抱いているように感じられたのは、彼女こそが、海を抱いている存在だったからである。彼女自身の中に、恵理は海そのものという他ない存在であるが、しかし、恵理が心身の内奥に秘匿している海とはいかなるものであろうか。恵理にとつても、海はまた、「挑むものであり、永遠に対立するもの」でしかないものなのだろうか。

女性存在がその心身の奥に内蔵している海。それは女性自身でさえ容易には自己管理することが出来ない（女の部分）、（女の領域）と無縁であるはずはない。

ひっきりなしに潮風が吹きつけ、涙がこぼれて口に入る。やみくもに泣けて泣けて、目の前がよく見えないほどだった。私の中に無理やり閉じこめてあった海が、まるで季節はずれの台風みたいにやけっぱちに荒れ狂い、逆巻き、防波堤を乗り越えてあふれ出していた。

恵理が心身の内奥に禁圧して、秘匿していた海……。それは恵理を激しい自己嫌悪に陥れる「私がおなかに抱えているこの塊」と無関係であるはずがない。「家や学校での『藤沢恵理』、その『優等生』のペルソナの奥に隠匿していた（女の部分）、セクシユアリティー。「生まれる性別をまちがえてしまった」と思わざるを得ないセクシユアリティー。「心の欲望と体の欲望とがシンクロしていない」性の領分。このようなどろどろした暗い情動に縁取られた恵理のおなかの「塊」。

恵理が「おなかに抱えているこの塊」こそが、彼女が「無理やり閉じこめてあった海」であろうが、親密にじゃれ合っている都と隆之を目撃した場面での「海」は、都へと激しく向かう「心の欲望」に限定して使われているであろう。親密に寄り添う都と隆之を目撃した時の「息もできないほどの嫉妬の渦」。「都を誰よりも大事に想っている」のに、都にとつての「特別」の存在になれない、というたまらなく辛い思い……。それでも、彼女へと向かうこの気持ちだけはどうしようもないのだ」。このような辛く悲しい自己否定感をもたらす情念、「私の中に無理やり閉じこめてあった海」とはそのような自己コントロール出来ないどろどろとした暗い情動だったのである。都と隆之を目撃した時、その「海」が心身の内奥から奔出して、恵理の自我を激しく揺さ振っているのだ。

恵理が心身の内奥に抱えている「海」、それは自我の奥底に禁圧しておくしかないもの、恵理に暗い自己否定感しかもたらさないものであろうか。

やがて、道はわずかに上り坂になった。坂の半ばを過ぎるあたりから、正面に海がせりあがってきて、左右の建物が切れたとたん、視界の隅々までが海と空の青でいっぱい埋めつくされる。このときの、すべての枷から解放されるような感じが好きだ。今日みたいに晴れた朝は、なおさらそう思う。

「海って、いいよねえ」

と都が言った。

「あ、いま、同じこと考えてた」

恵理と都という二人の女性が期せずして考えていた「同じこと」。海の素晴らしさ、人の心を晴れ晴れとした解放感にあふれさせる海の素晴らしさ。「すべての枷」は、恵理がおなかの中に内蔵している「塊」に局限されるものではあるまい。人が人であるがゆえに、人が社会的存在であるがゆえに背負わざるを得ない「枷」。自意識の痛苦、対人関係の葛藤、（女の部分）のままならなさ、……。人がこのように背負わざるを得ない「すべての枷」から解放してくれるものが海だというのである。女性自身が抱いている海、「いとまたやすく体の中に抱いている」海によって、「すべての枷」から解放されるのが可能だというのである。その身体に海を内包している海そのものである女性は、単独者として、「すべての枷」から解放される機縁を持っていると言うべきであろう。

心身の内部に海を内蔵しない男性は、「すべての枷」から解放される術はあるのだろうか。

やがて、私は重たい腕を持ち上げ、光秀の頭を抱きかかえた。少しして、彼の肩や背中からこわばりが抜け落ち、私の上にかかる重みが増した。

彼の髪をそつと指で梳く。彼が、くぐもったのど声をもらす。

なだめるように、ゆっくりと撫で続けた。

そうしていると、なんだか、私が彼を産んだような気がした。

あの親父も、かつてはこんなふうにおふくろを抱き、おふくろの海に自分を解き放ったのだ。だから今、僕がここにいる……。

ゆっくりと昇り、昇り、昇りつめていった恵理が、やがて、どこか幼い声をあげて達した。

優しさのやり取りである男／女の身体的合一。その存在の重みを無意識的に恵理に委ねる光秀、その重みを包み込むように受け止める恵理。海を抱くことが、海に抱かれることであるような相互行為、抱く／抱かれる、という愛の営み、相互依存行為が成立しているのである。海を内蔵しない男性が、「すべての枷」から解き放たれるのは、この磁場においてではない。光秀の父親が、「おふくろを抱き、おふくろの海に自分を解き放った」ように……。『おふくろ』という海を抱くことで、『おふくろ』という海の中に自己放棄することが可能となり、『すべての枷』から解放されるのである。

その存在を開いて、おのれの海の中に男性を受け入れ、おのれの海の中に男性を解放させる時、女性は限りなく母性的な存在になっているのだ。産む性としての存在、母親として、男性をおのれの海に憩わせているのである。抱く／抱かれる、という関係性の男性を産み出した母親であるかのような安堵感、満足感を持って。

しかし、恵理が、「どこか幼い声をあげて達した」ように、性的合一の自己放棄の忘我の瞬間に、母親から幼子に成り代わってもいるのだ。抱く／抱かれる、という男／女の愛の営みは、互いに幼子になり合う行為であるのかも知れない。相互に幼子になり合うという、忘我の自己放棄によってこそ、相互に、「すべての枷」から解き放たれるのかも知れない。